

新体操の沿革と1980年代ブルガリア作品が現代へ付与したもの

—採点規則と舞踊に焦点をあてて—

山本 里佳 (明治大学大学院情報コミュニケーション研究科／国士舘大学)

History of Rhythmic Gymnastics and the Contribution of 1980s Bulgarian Routines to the Present: Focusing on the Code of Points and Dance Elements

Rika YAMAMOTO (Meiji University School of Information and Communication / Kokushikan University)

Abstract

Rhythmic gymnastics emerged through the influences of Noverre, Dmený, Duncan and Dalcroze, among others, who developed innovative expressions and exercise systems within the fields of dance and gymnastics (International Gymnastics Federation, publication date unknown). Subsequently, due to the expansion of competitive elements in rhythmic gymnastics, the first Code of Points was issued. However, the 1973 edition of the Code of Points included the specification that a fundamental basis of any kind of ethnic or dance elements must not be required (Japan Gymnastics Association, 1973:20).

However, in the 1980s, the Bulgarian team incorporated dance elements in its choreography on the basis of this Code of Points, and attempted the addition of national identity to its routines. As a result, many accomplishments were made by the Bulgarian team, leading up to the present day (2022). This study examines the history of rhythmic gymnastics and the process that led to the issuing of the Code of Points, and clarifies the reasons for the prohibition of fundamental dance elements in the 1973 edition of the Code of Points. In addition, this study considers the reasons why the Bulgarian team was able to intentionally incorporate folk dance elements, and was victorious even though such elements had been prohibited. Furthermore, this study identifies the concrete influence exerted by these Bulgarian routines on rhythmic gymnastics thereafter.

The results of this study demonstrate that respective influences, namely the philosophy of Medau, the first President of FIG (Fédération Internationale de Gymnastique), the routines created by Robeva, former head coach of the Bulgarian national team, and the innovation of Aburuzzini, President of the Rhythmic Gymnastics Technical Committee, shaped the history of the development of the modern “Artistry” criteria of the Rhythmic Gymnastics Code of Points.

Keywords: Rhythmic gymnastics, Code of Points, Bulgaria

はじめに：問題の所在と目的

新体操は舞踊や体操の分野で革新的な表現や運動システムを開発したJ.G.ノヴェール (Jean-Georges Noverre, 1727-1810)、G.デメニ (Georges Dmený, 1850-1917)、I.ダンカン (Isadora Duncan, 1877-1927)、É.J.ダルクローズ (Émile-Jaques Dalcroze, 1865-1950) などの影響によって生まれた (International Gymnastics Federation,

掲載年不明)。そして、その流れは北欧体操、表現体操、リズム体操、芸術体操などの諸流派に分岐する(松本, 2006: 626)。本研究でとりあげるブルガリア新体操は、東欧中心に発展した流派の一つ「芸術体操」に属している。競技としての新体操発展に伴い国際体操連盟(英: Internathional Gymnastics Federation 以下「FIG」と記す)女性芸術技術委員会は初の新体操採点規則「1973年度版新体操規則集」(以下「73年度版採点規則」と記す)を発行する。この73年度版採点規則は第1章から第9章までで構成されているが演技構成に求められる内容は主に第4章団体競技と第5章個人競技に記載されている。第4章団体競技を読み進めると第5条A構成「民族上にも舞踊上(古典的舞踊・近代的舞踏[ママ]など)にも基礎を求めてはならない」(財団法人日本体操協会, 1973: 20)という文章に突き当たる。前述のとおり新体操は舞踊を基礎として発展した経緯を持つが、ここで73年度版採点規則では何故、舞踊の基礎が禁止されたのかという疑問が生じる。だが、この採点規則のもとでブルガリアはあえて1980年代の作品構成に舞踊要素(民族舞踊、モダンダンスなど)を導入し自国のアイデンティティを付加するという挑戦をした。その結果、ブルガリアは1974年から1999年の主要国際大会で294個のメダルを獲得している(NATIONAL SPORTS ACADEMY “VASSIL LEVSKI”, 掲載年不明)。そこでさらに3つの疑問が生じる。まず、ブルガリアが73年度版採点規則で禁止されていた民族舞踊を作品に導入した理由、次に採点規則を遵守しない作品構成の実施にもかかわらず連勝できた経緯、そして、ブルガリア作品がその後の新体操に付与した具体的影響は何かという根本的疑問である。これらの疑問を解くために新体操の沿革と採点規則発行までの経緯について調査し、これまで明示されることのなかった新体操の歴史の一端を明らかにすることを目的とする。

1. 先行研究

新体操採点規則に関する先行研究は、①採点規則と演技構成 ②採点規則と芸術 ③日本における採点規則の歴史 ④採点規則の比較研究 ⑤採点規則の歴史の変遷と競技内容に関連する研究等が挙げられる。⑤は高橋(2000)、村田(2002)等が行っているが、主に採点規則と競技のかかわりに焦点が当てられている。朝倉(2005)は日本体操協会新体操教本で日本と海外の新体操の歴史を述べているが採点規則との関連については触れていない。また、ソビエト社会主義共和国連邦(1922年から1991に存在した世界初の社会主義国家、以下「ソビエト」と記す)のオルロフ(1952, 1973)、シシユカレヴォイほか(1954)、ナイバック(1984, 1985)、リシツカヤ(1989)、ビリュック(1990)、ブルガリアのミレフ(1970)、ギゴヴァほか(1989)、ツヴェトコヴァほか(2002)、ガンチェヴァ(2018)、日本の渡部(2009)、等が舞踊と新体操全般の歴史の変遷についてくわしく研究している。ドイツのリズム体操(後のModern Gymnastics=新しい体操)の歴史については安則(2010, 2011, 2013, 2020)、菅井(2020)の研究がある。本稿の考察はこれらの資料に負うところが多いがこれまでの先行研究において73年度版採点規則と東欧の新体操や舞踊との関連研究はなされていない。

2. 研究方法

ソビエト、ブルガリア、日本の新体操に関する先行研究を中心に調査を行った。更に1974年から1999年にかけてブルガリア新体操ナショナルチーム総監督を務め多くの作品構成をてがげたN.S. ロベヴァ(Нешка Стефанова Робева, 1946-)と1984年から2008年までFIG新体操技術委員長を務め、採点規則を作成したイタリアのE. アブルツィーニ(Egle Abruzzini, 1936-)そしてその周辺人物に半構造化インタビューを実施した。

そのなかでロベヴァには1980年代の作品創作全般について、アブルツィーニには採点規則の成立過程について確認した。さらにブルガリアナショナルスポーツアカデミー教授のG.G.ディミトロヴァ（Гюрка Ганчева Димитрова, 1954- / 以下、学術論文名表記「ガンチェヴァ」と記す）、にはブルガリア新体操史の聞き取り調査を行った。

3. 新体操の歴史

ここで本研究の問いの核心の一つ、73年度版採点規則「舞踊上に基礎を求めることの禁止」についての経緯を探るために新体操の歴史を概観する。

3-1. 新体操の起源

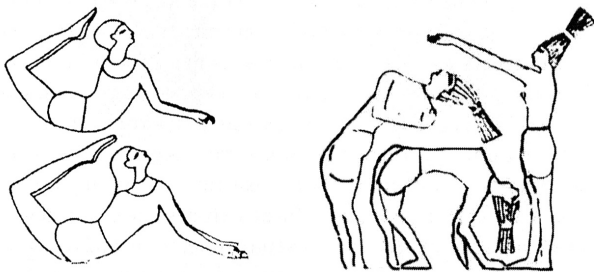


図1. ピラミッドに描かれた絵（およそ紀元前2000年前）
（ガンチェヴァ, 2018: 8）より転載

新体操の起源は古代に遡るといわれ、その一例に古代エジプトのピラミッドに描かれた背中を大きく後屈させた女性やボールを持ってグループで踊る女性たちの姿（図1）を挙げることができる（International Gymnastics Federation, 掲載年不明）。現代の新体操は特にダンカン、ダルクローズに大きな影響を受けている。ダンカンはアカデミックなダンス・クラシックの技法を避け思想と感情を身体によって表現し、その影響を受けたダルクローズ

は音楽リズムを身体運動に置き換えるシステムとしてリトミックを考案した（片岡, 1994: 47, 250）（安則, 2013: 39）。このようにダンカンの舞踊はダルクローズのリズム体操にひきつがれ新体操の基礎が築かれた。これらの経緯により新体操は医学的な機能効果を主眼にしたデンマーク体操などの北欧体操、演劇的感情の表出を重視した表現体操、ドイツ中心の音楽リズムと運動リズムを結合させたリズム体操、ソビエトを中心とする古典バレエを打破しようとする新たなダンス的発想に基づく芸術体操などの流派に分岐した（松本, 2006: 626）。その他に新体操に影響を与えた重要な人物にF.デルサル（François Delsarte, 1811-1871）、R.ボーデ（Rudolf Bode, 1881-1970）、R.ラバン（Rudolf von Laban, 1879-1958）、M.ウィグマン（Mary Wigman, 1886-1973）の名を挙げることができる（FIG, 掲載年不明）。特に新体操の発展に大きく貢献したダルクローズの弟子ラバンは舞踊の手法、振り付けと記録の手法を考案し、ボーデはダルクローズとは逆に音楽を体操のためにどこまでも伴奏として役立てる方法を採用した（安則, 2013: 40）。こうして20世紀初頭、デルサルとダルクローズの弟子の多くがこれらの経験を世界各地でひろめ、後進を育成し、後の新体操のパイオニアとなった。

3-2. ドイツのリズム体操から発展した Modern Gymnastics

次にリズム体操から新体操への流れについて考察する。20世紀初頭、ボーデの弟子H.メダウ（Hinrich Medau, 1890-1974）はリズム体操をドイツで継承発展させ、これを新しい（Neu）体操としてModerne Gymnasticsと名づけた。メダウは健康のための体操的動作習得をねらいとした18世紀のドイツの教育学者J.C.F.グーツムーツ（Johann Christoph Friedrich GutsMuths, 1759-1839）（村田, 2011: 14）やスウェーデン体操の考案者P.H.リング（Pehr Henrik Ling, 1776-1839）の構想を「近代的、モダンな、新しい（Modern）」

と評価した。つまりメダウはあくまで体操改革運動の成果として、広い意味での「新しい (moderun und neu)」という意味を用いたため、以後 Moderne Gymnastics は「新しい体操」と訳されることになる（菅井, 2020 : 46-47）。1967年第3回世界新体操選手権大会（コペンハーゲン）以降に日本に伝搬された Modern Gymnasatics（国際名称）を、当時の日本体操協会の通訳・永持顧問が「新しい体操」＝「新体操」と翻訳した（朝倉, 2005 : 2-3）のはこの流れによるものであろう。

3-3. 東欧の芸術体操

一方、ソビエトでは革命初期の1923年、初代教育人民委員（文化大臣にあたる）A.V.ルナチャールスキー（Анато́лий Васи́льевич Лунача́рский 1875-1933）がマルクス主義を普及させる手段として芸術を用いて人民を感化する（ルナチャールスキー, 1975 : 19）という目的のもとソビエトにダンカンスタイルとダルクローズのリズム体操のスタジオを開設する。さらにルナチャールスキーは1936年にダンカンとダルクローズの運動を基本に体操教師の養成を開始した（リシツカヤ, 1989 : 12）。それからレニングラードのP.F.レスガフト身体文化専科大学のオルロフは新体操の論理的研究と方法論を立ち上げる。オルロフの研究はその後の東欧新体操の教科書や採点規則、トレーニングシステムに多くの影響を与えることになった。こうしてソビエトでは1962年に舞踊から発展した女性スポーツとして新体操の正式名称が芸術体操（ロシア語原文：Художественная гимнастика）という呼称に決定される。以後、ソビエトから新体操が伝搬された東欧では新体操を芸術体操と呼ぶことになったのである（ガンチェヴァ, 2018 : 83）。

3-4. FIG 発足と新体操の成立

Modern Rhythmic Gymnastics
Technical Committee 1976



Julia Chichmanova, Kveta Cerna, Jeannine Rinaldi,
Irmoard Foerster, Andreina Gotta, Valentina Bataen, Evelyn Koop

写真 1, GYM.Media.com より転載

<https://www.gymmedia.com/RhythmicGymnastics/Jeanne-Rinaldi->

1951年、メダウの Modern Gymnasatics（新しい体操）という概念が正式な承認を受け FIG が発足する。メダウは初代 FIG 会長になり（ギゴヴァほか, 1989 : 64）、1962年6月、プラハで開催された FIG 総会では新体操が公認された（ガンチェヴァ, 2018 : 83）。しかし、ソビエトを中心とした東欧諸国はルナチャールスキーがダルクローズ的の体操教師の育成を指示した1923年をソビエト新体操の出発点と定めているため（リシツカヤ, 1989 : 12）それ以後も Modern Gymnasatics と呼称変更することなく Художественная гимнастика としている。新体操の国際的発展は FIG 女性芸術技術委員会のフランスの B. ヴィランシェ（Berthe Villancher とイタリアの A.G. サッコ（Andreina Gotta Sacco, 1904-1988）のイニシアチブによるものであった。1970年代は、まだ FIG に新体操技術委員会は存在せず女性芸術技術委員会としての活動の中でヴィランシェ、サッコ（写真2では Gotta と記

載）、ロシアの V. バターン（Valentina Bataen, 生没年不詳）、ドイツの I. ファースター（Irmoard Forster, 生没年不詳）などの委員が新体操の採点規則作成を担当した。つまりこの委員会が1973年度版採点規則を作成したのである。1980年、初の FIG 新体操技術委員会が発足しフランスの J. リナルディ（Jeannine Rinaldi, 1921-2017）が委員長に任命された（2022年2月28日のアブルツィーニからの返信より）（30th ANIVERSARY RHYTHMIC GYMNASTICS WORLD CHAMPIONSHIPS, MOSCOW, RUSSIA 20th-26th SEPTEMBER: 10）。

4. 新体操採点規則の成立

次に73年度版採点規則に関わる問題を追究するため採点規則作成の過程に焦点をあてる。1952年、ソビエトではモスクワ当局とL.P.オルロフ（Лев Павлович Олров, 1902-1986）が『体操』の教科書（身体文化とスポーツ出版）に初めて「芸術体操」の項目を記載した。オルロフが提唱した新体操の基礎動作分類表には国民ダンス（ソビエト連邦内の民族舞踊）要素やダンスコンビネーションが組み込まれ、この方法論がその後のソビエトの新体操に影響を与えた（ガンチェヴァ, 2018: 77-78）。そして1960年12月8日にはブルガリアで初の競技用採点規則「ブルガリア身体文化とスポーツ協会連盟共和国体操部 新体操採点規則」（医療と身体文化出版）が誕生する。執筆はブルガリアナショナルスポーツアカデミー初の新体操教員であるM.ハジイスカ（Мария Хадийска, 生没年不詳）が中心となりブルガリア体操協会のM.ハキム（Мони Хаким, 生没年不詳）器械体操コーチ連盟のR.ペンチェヴァ（Радка Пенчева, 生没年不詳）、P.スタイコヴァ（Парашкева Стайкова, 生没年不詳）、M.アントノヴァ（Мария Антонова, 生没年不詳）が行った（ツヴェトコヴァほか, 1998, 1999: 14-15）。こうして東欧の新体操は舞踊から発展した女性の競技スポーツとして急速な発展を遂げていく。

ただしアブルツィーニが60年代にはイタリアでも独自の採点規則を有していたことを語っているほか、日本体操協会から1967年第3回世界新体操選手権大会の視察に派遣された加茂佳子（1943-）も日本独自の採点規則を有していたことを語っていることから、世界各国が独自の採点規則のもとに競技を成立させていたことが認識できる。

5. 73年度版採点規則「舞踊上に基礎を求めることの禁止」の根拠

73年度版採点規則で舞踊上に基礎を求めることが禁止された経緯は1967年に出版された『新しい体操ーメダウの教授法』に見出すことができる。メダウは自分の体操を「ダンスやショーではなく」体操改革運動初期の「純粋体操」をひきつぐものであると述べている（菅井, 2020: 46）。ここでメダウが述べる純粋体操とは、呼吸や循環、骨組みや筋肉の相互作用の調和に緊張と解禁のリズミカルな交差や繊細に感じ取られる動きの経過に注意が向けられること（菅井, 2020: 53）というものである。それゆえFIG会長メダウが提唱したModern Gymnastics（新しい体操）の初代採点規則に舞踊上に基礎を求めることの禁止とリズム重視が記載されていることはごく自然な流れであるといえよう。

もう一つの経緯にFIG女性芸術技術委員会との関連が推測される。その理由はFIG新体操技術委員会が1980年発足であることが挙げられるが、この件についてアブルツィーニから下記の証言を得ることができた。

1973年以前の採点規則は作品評価の基準を示すために随時発行されていたものであり、FIG公式の国際採点規則ではありませんでした。最初の公式国際採点規則は、80年から84年の間に作成され、1984年に発効したロサンゼルス・オリンピック用がFIGに認められた最初のもので（公式規則がなければ、IOCはこのスポーツを認めなかったでしょう）。「民族舞踊と舞踊の禁止」は、多くの採点規則の一つに含まれています。これらの採点規則は、当時はまだ新体操のための特定の技術委員会がなく、女性芸術技術委員会の一部の委員だけが新体操の初期の大会（およびその規則）を担当していたので、女子体操の技術委員会によって詳述されました。私は委員会におりませんでしたので、禁止の理由を正確には知りませんが、私たちは体操と民族舞踊を明確に区別したいと思っていました。（2022年2月28日のアブルツィーニからの返信より筆者訳出）

この回答から73年度版採点規則が公式規則ではなかったため各国体操協会から発行されていた理由が明確になった。さらに民族舞踊の禁止の理由についてもつづられているが、FIGはこの時期にメダウの意図の他に体操と舞踊の区別、つまりスポーツと芸術の区別を模索していたと捉えることができよう。これらの裏付けをとるため2022年3月24日にFIGセクレタリーのS.マルティネット（Sylvie Martinet/本人の意思により生年は記載しない）に73年度版採点規則原本と編集者名簿の提供を依頼したが、マルティネットの回答から2008年にFIG本部がムティエからローザンヌに移転した際、多くの歴史的資料を喪失し現存しないことが判明した。したがってこの問題に関してはアブルツィーニの証言に留まる。

6. 民族舞踊を導入したブルガリア

本章では問いの二つ目である73年度版採点規則で禁止されていた民族舞踊をブルガリアが作品に導入した理由について考察していく。

ロベヴァは1980年代から1999年までの間、多くの新体操作品に民族色を導入した。1988年、ロベヴァはソウル・オリンピック前にNHKで放送された「妖精たちのふるさと—新体操王国とブルガリア」で自身の新体操観について「私にとって新体操とは画家と絵、作曲家と音楽の關係に等しいものです。それは、人間の思想を表現する方法なのです」と語っている（渡部, 2009: 11）。この言説を踏まえロベヴァが関わる作品群とそのモチーフをここに挙げる。1986年第5回ヨーロッパ新体操選手権大会・1987年第13回世界新体操選手権大会団体作品—ブルガリア民話／ロベヴァ構成、1988年第6回ヨーロッパ新体操選手権大会団体作品—I. ミレフ（Иван Милев 1897-1927）作の絵画《我らの母は永遠に黒衣を纏う》／ロベヴァ構成、1989年第14回世界新体操選手権大会団体作品—ブルガリアラドミル村民族舞踊／団体ヘッドコーチのE. アンゲロ



写真2, 1986年・1987年 民話を題材に岩山を表現したポーズ 写真提供：ネシュカ・ロベヴァ

ヴァ（Ефросина Ангелова 1954-）構成・ロベヴァ監修等。これらの作品群は民族色と内面性を重視し73年度版採点規則の「民族上にも舞踊上（古典的舞踊・近代的舞踏など）にも基礎を求めてはならない」という減点項目に真正面から挑むものになっている。芸術の姿が「色や形、音や言葉、あるいは自分自身の身体を使って何かあることを表現する技術活動」であるならば（徳丸ほか, 2002: 14）、これらの作品群はメダウやFIG女性技術委員会の思想を異にする芸術そのものを意識した作品となる。そこで73年度版採点規則で禁止されていた民族舞踊を作品に導入した理由をロベヴァに聞いた。

芸術のない新体操などありえません。採点規則に舞踊要素がなくても芸術がなければなりません。ですから舞踊要素を入れたのです。それが世界の新体操を変えたのです。

選手たちがブルガリアの音楽で演技を実施してメダルを獲得したとき、ブルガリア国民は幸せでした。そして、ブルガリアが世界にその美しい姿を見せたことを国民やT.ジフコフ（Тодор Живков 1911-1998）共産党書記長は大変喜んでくれました。（2021年10月2日、2022年8月11日、ロベヴァへの聞き取り調査より）

ここでロベヴァは「音楽、手具、舞踊、思想の融合により新体操の表現を芸術の高みにまで昇華させる

ことを目的としていた」ということを語っている。さらに3-3. 東欧の芸術体操でも述べたとおり東欧の新体操は社会主義国家体制の国策として文化・芸術推進の役割を担う側面があったのである。

7. ブルガリアの連勝と新体操の改革

採点規則を遵守せず民族舞踊や自国のアイデンティティを鮮明に打ち出したロベヴァは何故、減点を免れたのだろうか。ソビエト・ブルガリアは芸術体操を推進する立場として1966年から連続的にFIG新体操技術委員を輩出した。4年ごとのオリンピックイヤーに行われるFIG総会の選挙で決定されるFIG新体操技術委員会は、1名の委員長と副委員長を含む異なる国の6人の委員で構成される（International Gymnastics Federation, 掲載年不明）。FIG新体操技術委員会は世界の新体操の規律に関する責任を持ち、採点規則の作成、国際審判講習、審判管理などを司る。新体操の方向性はFIG新体操技術委員に委ねられるため委員会による採点規則の解釈が採点傾向に反映されていく。よってブルガリアの技術委員は新体操の強国としての発言力と影響力を保持しつつ、勝利と芸術への改革の双方を推進することができた。当時、日本の国際審判でもあった加茂は「採点規則で舞踊が禁止されていてもブルガリアには誰も減点しようとはしませんでした。それほど演技は素晴らしいものでした」と証言している（2022年5月2日、加茂への聞き取り調査より）。結果としてロベヴァの作品は採点規則の枠を超え、各国の審判を唸らせるものになったのである。

8. ブルガリア作品構成が新体操界に与えた影響

新体操の基礎の一つとなるダンカンの舞踊について、精神科医師でもあり舞踊評論家である石福は「(ダンカンの新しい舞踊は) 肉体を動かすことによって音楽の光と振動を舞踊の中に表現し一切の束縛を断ち切った」(石福, 1974: 164-165) と述べ、これが当時の舞踊界における功績であると指摘している。これは、新体操界におけるロベヴァの功績と似ていると考える。ロベヴァは自身の作品群を用いて、メダウの「呼吸や循環、骨組みや筋肉の相互作用の調和に緊張と解禁のリズミカルな交差や繊細に感じ取られる動きの経過に注意が向けられる」新しい体操(リズム体操)の束縛を断ち切るにより、新体操を芸術体操にシフトさせようとした。FIGは1998年度版採点規則で「舞踊要素の禁止」を解き「ワルツ・ステップ、ギャロップ、ステップ等」の文言、振り付けのアイディア[ママ]と音楽の関係(財団法人日本体操協会, 1998: 61, 63)等の強調を始める。これらの経緯を踏まえガンチェヴァ(G.G.ディミトロヴァ、ブルガリアナショナルスポーツアカデミー教授)はロベヴァの作品群が世界に与えた影響について下記のとおりに述べている。

ブルガリアの新体操は常にその作品構成によって世界をリードしてきました。

この時代は舞踊要素が禁止されていましたが、この時ブルガリアは民族舞踊を取り入れた構成を実施しました。ブルガリアは総監督であったロベヴァが民族舞踊学校出身者でもあることも相まって、新体操の芸術性や舞踊を重要視していたのです。舞踊要素が禁止されていても演技構成に加え、その素晴らしさを表現し、メダルを獲得することで採点規則をより芸術的な方向に進めたのです。様々なことをブルガリアが取り入れた結果、採点規則は変更されました。ブルガリアは新体操の歴史を塗り替えてきたのです(2021年10月6日ガンチェヴァへの聞き取り調査より)。

9. 結論

FIG新体操技術委員長を1984年から2008年まで務めたアブルツィーニは新体操の歴史の中心に存在し、採点規則に芸術性を導入した人物である。以下はアブルツィーニの回答である。

私が行った革新は非常に多く、それらをリストアップすることはできません。新体操は50～60年代の女性の体操というベーシックスポーツからオリンピックの価値を高める複雑なスポーツに移行しました。しかし、多くの革新は選手自身によって提案されました。技術委員会もその提案者に含まれる価値があると考えるならば私達は選手の演技中の難度または振り付け要素のいずれかに新しい動きの可能性を提示したということでしょう。（2022年2月28日のアブルツィーニからの返信より筆者訳出）

こうして1980年代にブルガリア元ナショナルチーム総監督ロベヴァのブルガリア作品群がもたらした影響はアブルツィーニの革新を経て現代の新体操界で開花する。新体操の方向が初代国際体操連盟会長メダウの新しい体操から芸術体操へ舵を切るのは1998年度版採点規則「芸術的価値」という文言の表出、2005年、2009年、2017年度版の「民族舞踊を含む数多くのダンスステップの創作ガイド」の記載からである。2022年採点規則には「構成と芸術的パフォーマンスが（中略）アイデア［ママ］のガイド（演技の“ストーリー”）を創造することにより卓越された芸術性が達成される」「ダンスステップに動きのスタイルと特徴、動きの表現力、音楽の対比、観る人に特徴的で望ましい視覚的印象を与える」（国際体操連盟, 2022：106）など芸術と通底する文章が記載され、ここに新体操の沿革とブルガリア作品が採点規則に与えた影響を見ることができる。

ロベヴァは2021年の聞き取り調査で「創造性や芸術性はコンピューターでは感じられません。それは人間が肌身でしか感じるができないものなのです」と語っている。このロベヴァの語りは未来の新体操に更なる示唆を与えるに違いない。

注

- 1) 女性芸術技術委員会は現FIG新体操技術委員会の前身である。新体操技術委員会は世界の新体操の中心として採点や競技運営における規律を管理する責任と権限を持つ委員会である。技術委員会は、議会によって選出された1人の委員長と他の6人の委員（副委員長を含む）で構成されている。
- 2) 近代的舞踏と記されているが暗黒舞踏とは異なり「近代舞踊（モダンダンス）」などを指していると考えられる。
- 3) 聞き取り調査の期日と方法は次の通りである。ロベヴァ（2021年10月2日／電話、10月4日／電話、2022年8月11日／対面）、アブルツィーニ（2022年2月28日／メール）、ガンチェヴァ（2021年10月6日／電話、2021年11月9日／Messenger）。
- 4) 自然科学、特に生理、解剖学に基づく幾何学的で形式的な部分運動の組み合わせであったそれまでの体操に対する批判から始まったもので体操改革運動を牽引したF.ヒルカー（Franz Hilker, 1881-1969）は、「人間を生命ある者として、より内的な法則性から作用するリズムカルな存在と見なすことが、まず一番に大事である」と述べている（菅井, 2020：46）。
- 5) ブルガリアの技術委員は在任順にI.チャカロヴァ（Иванка Чакарова, 任期1966-1976）、ロベヴァの師J.シシマノヴァ（Жулиета Шишиманова, 任期1976-1978）、ロベヴァの同僚であるギゴヴァ（Мария Гигова, 任期1978-2000, その後2021年まで3期）、シシュコヴァ（Тодорка Шишкова, 任期1985-1993）であった（ツヴェトコヴァほか, 2002：124）。2022年から元世界チャンピオンでロベヴァに師事したM.ペトロヴァ（Мария Петрова, 任期2022-2024）が就任。いずれもロベヴァに縁のある人物である。

文献

- 1) 朝倉正昭, 2005, 「第一章新体操の成立 I. 沿革 日本における新体操 II. 新体操への移行」, 『新体操教本』, 財団法人日本体操協会 総務委員会 指導者育成部: 東京, 2-75.
- 2) Бирюк.Е.В., 1990, “Развитие Художественной гимнастики как вида спорта. Метдические рекомендации”: КГИФК, Киев, 掲載頁不明. (ビリュック, 1990, 芸術体操のスポーツとしての発展と方法の変遷: KGIFK, キエフ, 掲載頁不明).
- 3) International Gymanastics Federation, 掲載年不明, “DISCIPLINES RHYTHMIC GYMNASTICS DISCIPLINES History”, (国際体操連盟, 掲載年不明, 種目 新体操 歴史). [https://www.gymnastics.sport/site /pages/disciplines/hist-rg.php](https://www.gymnastics.sport/site/pages/disciplines/hist-rg.php) (最終検索日 2022 年 9 月 23 日)
- 4) International Gymanastics Federation, 掲載年不明, “TECHNICAL COMMITTEES About the FIG”, (国際体操連盟, 掲載年不明, 技術委員会 FIG について), <https://www.gymnastics.sport/site /pages/about-technical.php> (最終検索日 2022 年 9 月 23 日)
- 5) International Gymanastics Federation, 2010, “FIG RHYTHMIC GYMNASTICS TECHNICAL COMMITTEE PRESIDENTS FOR THE PAST 45 TEARS:” 30th ANIVERSARY RHYTHMIC GYMNASTICS WORLD CHAMPIONSHIPS, MOSCOW, RUSSIA 20th-26th SEPTEMBER: 3-53, Moscow. (国際体操連盟, 2010, 「過去 45 年の FIG 新体操技術委員会委員長:」, 『世界新体操選手権大会第 30 回記念, モスクワ, ロシア 9 月 20 日-26 日』: 3-53, モスクワ).
- 6) Ганчева.Г., 2018, “IV .4. Художествена гимнастика катоспортна дисциплина, IV .6. Начало и метдическо обезпечаване на дисциплина, Художествена гимнастика истрически аспекти”, БОЛИД ИНС: 2-128, София. (ガンチェヴァ, 2018, 「IV .4. スポーツ種目としての芸術体操 IV .6. 初期の種目の提示方法」『芸術体操の歴史的側面』, BOLIDINS: ソフィア 2-128).
- 7) ギゴヴァ, 四位, ブルガリア新体操協会, 日本体操協会新体操委員会, 1989, 「新体操 前史」, 『ローレズ オブ ビューティー写真で見る新体操の歴史』, 中教出版: 東京, 1-165.
- 8) GYM.Media.com, <https://www.gymmedia.com/RhythmicGymnastics/Jeanne-Rinaldi->
- 9) 石副恒雄, 1974 「第六章 モダンダンス」『舞踊の歴史=生きられた舞踊論』紀伊国屋書店: 東京, 5-210.
- 10) 片岡康子, 1994 「3. モダンダンス技法の変遷 (2) 獲得された表現形式」『舞踊学講義』, 大修館書店: 東京, 2-256.
- 11) Милев,Н., 1970, “Принос към историята на гимнастиката у нас през епохата на национарното ни възраждане”, ВИФ София, Дисертация, 掲載頁不明. (ミレフ, 1970, 「国家復興時代を通じた私たちの体操の歴史への貢献」, BIF ソフィア, 論文, 掲載頁不明)
- 12) 松本芳明, 2006, 「体操」『最新スポーツ科学事典』平凡社: 東京, 1-919.
- 13) 村田由香里, 2011, 「新体操の採点規則に関する哲学的研究—運動特性および競技性と採点規則との適合性を中心に—」, 『日本体育大学紀要』, 41 (1): 13-24
- 14) ルナチャールスキー: 藤井一行編訳, 1975, 『芸術表現の自由と革命』, 大月書店: 東京, 3-233.
- 15) Найпак,В.Д.,1984, “Страницы истории-признание//Гимнастика”, ФиС: Москва, 掲載頁不明. (ナイパック, 1984, “歴史の頁—知識 //体操”, FiS: モスクワ, 掲載頁不明)
- 16) Найпак,В.Д.,1985, “Страницы истории-признание//Начало пути Гимнастика”, ФиС: Москва, 掲載頁不明. (ナイパック, 1985, “歴史の頁—知識 // 体操の道の始まり”, FiS: モスクワ, 掲載頁不明)
- 17) NATIONAL SPORTS ACADEMY “VASSIL LEVSKI”, 掲載年不明, “Rhythmic gymnastics”. (国立スポーツアカデミー “ヴァスシル・レフスキー”, 掲載年不明, 「新体操」). “Distinguished coaches Neshka Robeva”. (分類 コーチ ネシュカ・ロベヴァ). <https://www.nsa.bg/en/faculty/department/branch/48/subpage.96>. (参照 2021 年 12 月 4 日).
- 18) Олров,А.П., 1952, “Гимнастика”, Учебник, ФиС: Москва, 掲載頁不明. (オルロフ, 1952, “体操”, 教本, FiS: モスクワ, 2-595).
- 19) Олров, А.П., 1973, “Художественная гимнастика”, ФиС: Москва, 掲載頁不明. (オルロフ, 1973 “芸術体操”, FiS: モスクワ, 2-188).

- 20) Шишкарёвой, Ю. Н., Олров, А.П., 1954, “Художественная гимнастика”, ФиС: Москва, 掲載頁不明. (シシユカレヴォイ, オルロフ, 1954, “芸術体操”, ФиС, Москва, 27-121) .
- 21) 菅井京子, 2020, 「1970年代のメダウの学校における方向転換について—H. エルプグートとH.J. メダウの共著『ある学校のポートレート』—を手掛かりにして」, 『スポーツ史研究』, 第33号: 43-56.
- 22) T.S. リシツカヤ: 加茂佳子ほか訳, 1989, 『ソ連の新体操—その科学的トレーニング』, 不昧堂出版: 東京, 3-213.
- 23) 高橋衣代, 2000, 「新体操の歴史的変遷と採点規則の変化について」, 『東京女子体育大学東京女子体育短期大学紀要』, 35巻: 59-79.
- 24) Цветкова, А., Гигова, М., Ђатова, П., 2002, “В НАЧАЛОТОБЕ ТАНЦЪТ”, “ПЪЛНО ПРАВЕН СПОРТ”, 50 години Българска художествена гимнастика, Българска федерация по художествена гимнастика: София, 1-99. (ツヴェトコヴァ、ギゴヴァ、バトヴァ, 2002, 「最初はダンスだった」「完全に合法的なスポーツ」, 『ブルガリア新体操50年』, ブルガリア新体操協会: ソフィア, 11-99).
- 25) 徳丸吉彦、利光功「1 序論 芸術文化とその政策 2. 芸術の意味」, 『芸術文化政策Ⅰ 社会における人間と芸術』, 財団法人放送大学教育振興会: 東京, 2002, 3-158.
- 26) 渡部愛都子, 2009, 「一章 新体操の故郷を求めて」, 『新体操はスポーツか芸術か』, 株式会社幻冬舎ルネッサンス: 東京, 3-191.
- 27) 財団法人日本体操協会体操委員会編, 1973, 「第3章 競技会および各種大会の運営」「第5条 自由演技の採点 B 実施」「第5条 自由演技の採点 C 印象」, 『新体操規則集』 財団法人日本体操協会: 東京, 1-62.
- 28) 財団法人日本体操協会, 1998, 「芸術 (A)」, 『2009 新体操女子採点規則』, 財団法人日本体操協会: 東京, 9-140.
- 29) 財団法人日本体操協会, 2005, 『2005 採点規則 新体操女子』, 財団法人日本体操協会: 東京, 5-103.
- 30) 財団法人日本体操協会, 2009, 『2009-2012 新体操採点規則』, 財団法人日本体操協会: 東京, 3-92.
- 31) 公益財団法人日本体操協会, 2017, 『2017年-2020年 新体操採点規則』, 公益財団法人日本体操協会: 東京, 3-80.
- 32) 国際体操連盟, 2022, 「C 芸術 (A)」, 『2022-2024 採点規則 新体操』, 公益財団法人日本体操協会: 東京, 5-218.
- 33) 安則貴香, 2010, 「近代ドイツにおける新体操の運動形成に関する研究—ドイツ体操連盟 (Deutscher Gymnastik-Bund) の機関誌『ジムナスティック (“GYMNASTIK”)』(1926-1933) を手がかりに」, 『運動とスポーツの科学』, 16 (1), 17-25.
- 34) 安則貴香, 2011, 「ドイツ体操連盟 (Deutscher Gymnastik-Bund) 主催の「新体操教育会議 (Tagung für gymnastischer Körperbildung)」(1926) におけるプログラム構成・内容に関する研究: 雑誌記事の分析を中心として」, 『運動とスポーツの科学』, 17 (1), 43-53.
- 35) 安則貴香, 2013, 「20世紀初頭ドイツの新体操促進運動に関する一考察」, 『東洋大学学術情報リポジトリスポーツ健康科学紀要』, (10), 37-48.
- 36) 安則貴香, 2013, 「新体操促進運動における第3回芸術教育会議 (1905) の意義」, 『龜山幹夫教授、金子俊夫教授、河野大機教授、中村義人教授、秋本敏男准教授 退任記念号』, 経営論集 (81), 195-210.
- 37) 安則貴香, 2020, 「ナチス教員連盟傘下「ドイツトゥルネン・スポーツ・体操教員帝国同盟」の専門団体「体操とダンス」による 機関誌「体操とダンス」(1934年-1936年) の 寄稿論文目録」, 『東洋大学スポーツ健康科学紀要』, 17, 13-18.